中村欣一郎市長の

山椒は小粒でも…

Vol.82

フェリーで蒲郡へ行ってみた

10月の3日間、特別に蒲郡への便が運行され10月14日に乗船してきました。

伊勢湾フェリーさんが創業60周年、鳥羽市は市制70周年、同じ昭和の大合併で誕生した蒲郡市も70周年ということで、実にナイスな企画です。

伊勢湾岸道が整備されたことや高速道路の無料化、また近年ではコロナ禍に翻弄されるなど、その度に存続の危機にあった伊勢湾フェリーが存在感を示しています。

少し歴史をひもとくと、伊勢湾を結ぶ航路は古くは東海道五十三次の宮(名古屋)～桑名があります。こちらは伊勢湾をというより、木曽三川を渡るためというほうが正確かもしれません。かつては鳥羽～蒲郡というと、1962年から1982年まで水中翼船が、1969年からの10年間はホバークラフトも運航していました。ホバークラフトは何と35分で鳥羽までやってきました。

今回の船旅は、普段の伊良湖へ行く航路の約2倍、2時間10分かけてゆったりしたものでした。左手には吉田拓郎が伝説の2万人コンサートをした篠島、タコで有名な日間賀島、アートの島として魅力的な佐久島。右手には風力発電の風車が幾本も並ぶ渥美半島。正面の蒲郡にはシンボルである竹島や、小高い丘に蒲郡クラシックホテルが見えるなど、ずっと飽きることはありません。頭の中でよく知っている島々を、違った角度から見る。見慣れないところから見るのはいいものだと思いました。乗船中にスナメリの姿を見かけたという人もいました。

また、私が鳥羽から乗船する前には、蒲郡からのお客さんが嬉々とした表情で降りてくるのを見かけました。私が鳥羽に戻ったときには、満足そうな顔で蒲郡行きに乗ろうとする人たちも見ました。三日間のうち、朝一番の便で鳥羽から蒲郡へ向かわれたかたは約200人だったのに対し、蒲郡から鳥羽へ来られたかたは約1200人でした。やっぱり鳥羽の魅力は底知れないなと思いました。

ちなみに、蒲郡行きではなく通常の伊良湖行きですが、11月いっぱいは鳥羽市民限定の旅客運賃半額キャンペーン中です。なかでも11月7日(木)は60年前の運航開始記念日ということで、終日旅客運賃が全額無料だそうです(車両・特殊手荷物は通常運賃)。これはもう行くしかないですね！

私の後ろには歓迎のモニュメント「GAMA」

鳥羽市側のターミナル

人権文化の花を咲かせよう

Vol.233

市民課人権・市民交流係
☎㉕1126

そのとき、あなたは、何を着てた？

青の長袖ニットにデニム素材のズボン。白の半袖シャツに紺色の制服スカート。黄色の半袖カットソーに黒のショートパンツ。ピンクの子ども用パジャマ…ごく普通の、ありふれた服装に思える衣服。これらは、2023年に上智大学で開催された、性暴力被害と服装について考える企画「そのとき、あなたは、何を着てた？～What Were You Wearing?～」で展示された服装で、18歳から50代の20名の証言をもとに、性暴力被害時の着衣を古着で再現したものです。

このプロジェクトは、アメリカの倫理学者であるメリー・シマリングの、性暴力被害にあった自身の体験をもとにした「What I was wearing(私が着ていたもの)」という詩に着想を得てはじまりました。性暴力被害にあった時の着衣のイメージに近い服装を再現して展示することで、『性暴力被害に遭うのは服装が原因である』という先入観を取り払い、『あなたが何を着ていようと関係ない、被害にあったあなたは悪くない』というメッセージを発信することを目的としています。

2014年にアメリカのアーカンソー大学で初めて展示が開催され、その動きは全米の大学やヨーロッパ、アジアなどに広がっています。2022年にはニューヨークの国連本部でも開催され、軍服、手術着、男性の普段着、幼児の水着などが展示されました。

『被害者に原因や落ち度がある』『被害にあったら自己責任だ』という周囲の反応は、被害者を二次被害の苦しみに突き落とします。被害者の服装や行動は、性暴力を正当化する理由にはならないのです。

11月25日から12月1日は「犯罪被害者週間」です。周囲の無理解や心ない言動は、被害者を追いつめてしまいます。周りの人々の理解と配慮、協力が大切なのです。